

正法寺跡発掘調査概要報告書

— 四條畷市清滝所在 —

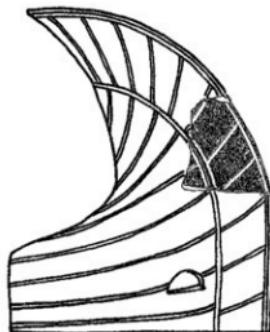


2002年3月

四條畷市教育委員会

正法寺跡発掘調査概要報告書

— 四條畷市清滝所在 —



2002年3月

四條畷市教育委員会

例　　言

1. 本書は、四條畷市教育委員会が平成13年度国宝重要文化財等保存整備費補助金事業の交付を受けて担当実施した市内遺跡発掘調査等（四條畷市清瀧所在の正法寺跡）の概要報告書である。
2. 正法寺跡は平成13年8月20日に着手し8月29日まで現地調査を行い平成14年3月31日に整理作業を終了した。
また、正法寺跡の南西隅に平成13年4月に開発に伴って調査を行った調査区についても、ここに報告する。
3. 調査は、四條畷市教育委員会社会教育部生涯学習課主任 野島 稔・技術職 村上 始が担当にあたった。
4. 現地調査の実施にあたっては、大成不動産 石岡則夫氏・株式会社丸勝 木曾宏一氏、小倉 亨、山地建設株式会社、中山建築設計事務所、四條畷市シルバー人材センターから数々の配慮を得た。記して感謝する次第である。
5. 発掘調査の進行については、大阪府教育委員会文化財保護課、鶴枚方市文化財研究調査会櫻井敬夫氏の指導・助言を得た。記して感謝の意を表したい。
6. 出土遺物の整理・実測などについては、野島稔、村上始、佐野喜美があたった。
7. 本書の執筆は野島 稔、村上 始が行った。

本文目次

例　　言

第1章 遺跡の位置と歴史的環境	1
第2章 調査にいたる経過	5
第3章 調査の成果	7
第4章 ま　と　め	20

報　告　書　抄　録

図　　版

図版目次

- 図版1 正法寺跡 01-2 調査前全景
- 図版2 正法寺跡 機械掘削・調査精査
- 図版3 正法寺跡 トレンチ内精査・遺構検出状況
- 図版4 正法寺跡 第4トレンチ遺構検出状況
- 図版5 正法寺跡 溝状遺構検出・完掘状況
- 図版6 正法寺跡 調査区完掘状況
- 図版7 正法寺跡 土坑検出状況
- 図版8 正法寺跡 土坑掘り下げ・完掘状況
- 図版9 正法寺跡 トレンチ内排水・埋め戻し状況
- 図版10 正法寺跡 01-1 調査前全景・調査スナップ
- 図版11 正法寺跡 瓦だまり検出状況・創建瓦出土状況
- 図版12 正法寺跡 瓦だまり出土状況
- 図版13 正法寺跡 出土遺物
- 図版14 正法寺跡 出土遺物

挿入目次

第1図	正法寺跡周辺地形遺跡分布図	2
第2図	正法寺跡調査区位置図	7
第3図	正法寺跡 01-2 断面実測図	9~10
第4図	正法寺跡 01-2 第4トレンチ土坑・溝状遺構内瓦出土状況	12
第5図	正法寺跡 01-2 第5トレンチ遺構内瓦出土状況及び断面実測図	13
第6図	正法寺跡 01-1 調査区遺構平面図・断面実測図	15
第7図	正法寺跡 01-1 調査区出土遺物	17
第8図	正法寺跡 01-1・-2 調査区出土遺物	19

第1章 遺跡の位置と歴史的環境

四條畷市は大阪府の北東部に位置する。四條畷市正法寺跡は大阪府四條畷市清滝に所在し、飯盛山系の西側斜面から派生する海拔30~35mの清滝丘陵上にある。南北に谷地形をなし、飯盛山系から西に向って、讚良川・岡部川・清滝川・権現川が流れている。

生駒山系の西側斜面の枚方台地は、北は京都府八幡丘陵から南は四條畷市南野丘陵までの淀川左岸にひろがる広大な丘陵、段丘があり、北から枚方市船橋川・穂谷川、交野市天野川、寝屋川市寝屋川、四條畷市讚良川・清滝川という中小河川によって開かれている。この枚方台地は、原始・古代における幾多の遺跡の存在が知られている。

旧石器時代

四條畷市周辺の旧石器時代の遺跡として、更良岡山遺跡の範疇である讚良川川床遺跡では、ハンドアックス・ナイフ形石器・細石器・削器・彫器などが出土している。また、四條畷市忍岡古墳付近・寝屋川市打上でナイフ形石器が採集されている。これらは枚方台地における旧石器研究上きわめて重要な位置をしめている。

縄文時代

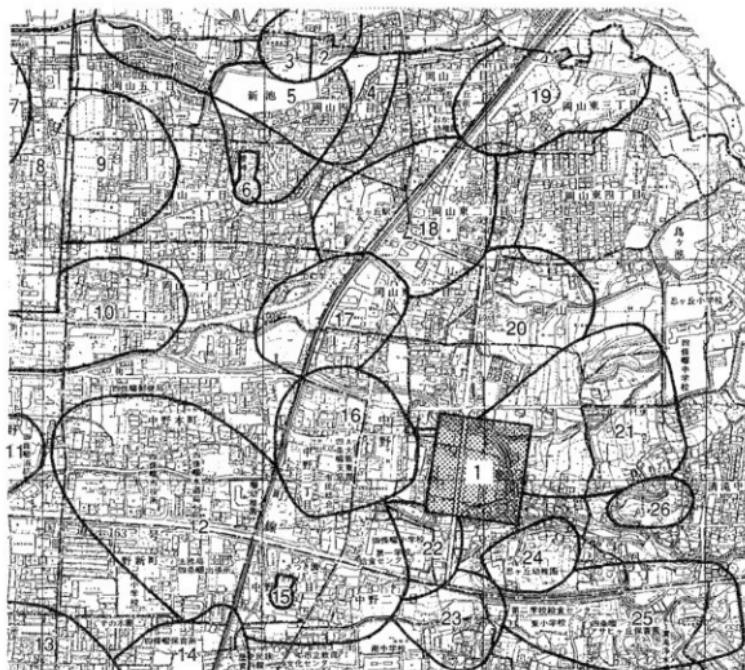
四條畷市田原遺跡や、交野市神宮寺遺跡、枚方市穂谷遺跡で米粒文・山形文を施した縄文時代早期の押型文土器などが出土している。これらは近畿地方における最古の土器である。また、JR忍ヶ丘駅の南側にある南山下遺跡で長さ11cmの完全な有舌尖頭器が出土している。

縄文時代中期は、四條畷市南山下遺跡・砂遺跡・寝屋川市讚良川遺跡がある。讚良川遺跡では大量的の船元式土器が出土した。

後期・晩期においては、四條畷市更良岡山遺跡で土偶・大型彫刻石棒・ヒスイ製石斧・土製勾玉などの祭祀具をはじめ高杯形土器・深鉢・注口土器などの土器類と多量の石器類が出土した。他に四條畷小学校内遺跡や大上遺跡・清滝古墳群で土器類や石鎌が出土している。

弥生時代

四條畷市雁屋遺跡で弥生時代前期の大壺（高さ78cm）が出土している。この大壺は北九州の板付II式といわれているものである。その壺に伴い石庵丁が2点出土した。そのうちの1点は奈良県耳成山の流紋岩製である。この石庵丁と大壺の出土は北河内で最初に稲作が開始されたことを示している。なお、この調査区の50m東で縄文時代晩期末の深鉢が出土している。その他、前期の遺跡は四條畷市田原遺跡、寝屋川市高宮八丁遺跡、大東市中垣内遺跡がある。



- | | | | | |
|------------|------------|-------------|---------------|-------------|
| 1. 正法寺跡 | 7. 沙道跡 | 13. 雁屋遺跡 | 19. 坪井遺跡 | 25. 城道路 |
| 2. 謙良川床遺跡 | 8. 謙良都朱里遺構 | 14. 南野米崎遺跡 | 20. 岡山市内遺跡 | 26. 岡山神社内遺跡 |
| 3. 謙良寺跡 | 9. 北口遺跡 | 15. 鳥ノ堂古墳 | 21. 清瀬古墳群 | |
| 4. 更良岡山遺跡 | 10. 奈良田遺跡 | 16. 鳥森井遺跡 | 22. 四福地小学校内遺跡 | |
| 5. 更良岡山古墳群 | 11. 建田遺跡 | 17. 南山下遺跡 | 23. 木間町北方遺跡 | |
| 6. 志津占墳 | 12. 中野遺跡 | 18. 志ヶ丘駅前遺跡 | 24. 大上遺跡 | |

第1図 正法寺跡周辺地形遺跡分布図

中期においては、畿内第Ⅲ～V様式に属する雁屋遺跡がある。雁屋遺跡で多数の方形周溝墓が確認され、コウヤマキ・ヒノキ・カヤなどの木棺が出土した。なかでもコウヤマキ製のものは完全な姿で出土した。ヒノキの木棺から完全な人骨も出土した。方形周溝墓の溝から墓前祭祀に使われた朱塗りの壺や把手付碗などが出土した。木製品では、双頭渦文が彫刻された蓋付四脚容器などがある。材質はヤマグワで朱彩されていたが、現在は朱の痕跡を確認することはできない。その他、ノグルミ製鳥形木製品は墓で使われた日本最初の出土例であった。また大阪府教育委員会の雁屋遺跡発掘調査でも集落跡から鳥形木製品が出土している。

石製品は大量に出土しているが、特筆すべきものは銅鐸の舌が2本出土していることである。そのうちの1本は徳島県吉野川産の塩基性凝灰岩質点紋片岩製である。銅鐸については、「明治44年

に、砂岡山から入れ子になった銅鐸 2 口が出土した」と伝えられる砂山銅鐸があるが、関西大学の所蔵となっている。その他、分銅形土製品が 2 点出土している。

雁屋遺跡で後期の V 様式に属する土器も多量に出土している。そのなかでも丹後・北陸地方の様式をもつ把手付き鉢（住居跡）や脚付き鉢（円形周溝幕）、出雲の様式をもつ低脚杯（包含層）は日本海側との交流を示している。

雁屋遺跡は《中期において拠点的集落であり、後期になるとその位置を保っていなかった》と考えていたが、大阪府内でもこのように活発な他地域と交流をした遺跡は見当たらず、雁屋遺跡が衰退したとは全く考えられない。雁屋遺跡は中期から後期まで拠点的集落として存在した重要な遺跡である。しかし、後期の土器については未整理のものが多く今後の研究の課題としたい。

古墳時代

古墳時代前期においては忍岡古墳がある。全長約 90m の前方後円墳である。この古墳の竪穴式石室は保存され見学できる。この古墳築造に関わった集落は確認されていないが今後の調査で発見できる可能性がある。

古墳時代中期になると四條畷市を中心にして馬の飼育が始まった。馬は朝鮮半島から運ばれ、渡来系の人々によって牧場が開かれた。

古墳時代の四條畷市は飯盛山系が南北に走り、山麓の西方 2 km ほどで河内湖となる。生駒山系から、讚良川・岡部川・清滝川・権現川が河内湖に注ぎ、この川が自然の柵となり牧場に適した環境であった。

鎌田遺跡では楽器のスリザサラや祭具を載せる台が、奈良井遺跡では犠牲馬の首をはじめ儀式で使われた人形・馬形の土製品やミニチュア土器が出土している。最近では大阪府教育委員会の調査による菖屋北遺跡で大量の製塙土器や鐘が出土し、注目されている。四條畷小学校内遺跡・奈良井遺跡・中野遺跡などで初期須恵器をはじめ韓式土器や韓式系土器が数多く出土し、渡来系の人々の存在を示している。

古墳については、墓ノ堂古墳をはじめ、馬飼の人々が墓域とした清滝古墳群や大上古墳群など次々と築造された。大上古墳群からは横穴式石室が発見されたが、鎌倉時代に盗掘され遺物のほとんどは失われていたが金銅装中空耳環が片方出土した。その他の古墳で多数の副葬品が出土している。

これらの古墳に伴う形象埴輪は少なく、埴輪のほとんどが集落から出土したものである。古墳からのものでは、忍ヶ丘駅前 2 号墳で琴を弾く人などがある。集落から出土したものとしては、忍ヶ丘駅前遺跡で人物埴輪・犬形埴輪（オスの子犬）・水鳥形埴輪、南山下遺跡で馬形埴輪、岡山南遺

跡で家形埴輪が出土している。なお、家形埴輪に伴って左足用の日本最古の木製下駄が出土している。

その他、大東市堂山古墳群、寝屋川市太秦古墳群・終末期の石宝殿古墳などがある。

奈良時代

古墳時代に飯盛山系山麓に築かれた古墳群が、奈良時代の正法寺建立の際に整地されたことにより破壊されており、ほとんどの主体部が削平されている。

その他、木間池北方遺跡の河川から円面硯や土器と共に土馬が7体出土した。南野遺跡では「大」の字を墨書した土器が出土した。

城遺跡では通産省との合同地震調査が行われ、生駒断層の跡が発見された。この断層の研究の結果、断層の上の層から奈良時代の須恵器杯が出土し、地震は奈良時代以前におこったと判断できた。その後、炭素年代法の分析から地震は縄文時代から弥生時代ごろであったことが判明した。近年、考古学と地質学が共同で研究する地震考古学が注目され地震予知の研究がなされている。

なお、奈良時代以降も数多くの遺跡が知られている。

第2章 調査にいたる経過

正法寺跡は四條畷市清滝に所在する。小字名で正法寺の地名が残り、古くから古瓦等の発見で寺跡の存在が知られていた。すでに古くから四條畷市清滝在住であった平尾兵吾氏著の『北河内郡史蹟史話』の中に正法寺のことが記されており、寺跡も広く壯麗な大伽藍が整っていたであろうと紹介されている。

また、瀬川芳則氏は、四條畷市文化財シリーズ3で『清滝の古寺正法寺と氏寺の造営』の論文を発表されている。

寺跡は長い間水田地であったが、昭和44年12月に府道新設バイパスによる発掘調査で、石積み基壇、東西にのびる土塙、井戸が検出し各遺構内から奈良時代前期～室町時代にかけての瓦や土器の出土が報告されている。これらの遺構や遺物から正法寺の創建と歴史について明らかにされた。主な伽藍は高台の東西・南北とともに1町四方の中におさまり、南から南大門・中門・東西の塔・金堂・講堂・食堂と並ぶ薬師寺式伽藍配置であろうと推定された。

当寺院は、白鳳時代から鎌倉・南北朝時代に至るまでの間存続していたことが発掘調査で裏付けられている。正法寺と同一時代の寺院として、南野丘陵の権現川沿いに旧龍尾寺跡、忍岡丘陵の先端に讚良寺、寝屋川市高宮庵寺の四寺が一直線上に等間隔に建立された。『正法寺縁起』に「元弘、建武の兵火に遇うて衆僧悉く退散しぬ。其の後堂閣僧坊悉く鳥有となり、僅かに三重の塔のみ尚存す」とある。

昭和51年と昭和52年の四條畷市教育委員会の調査で正法寺跡の範囲確認調査で中門跡の一部基壇が検出し、創建時の礎石や瓦等が発見された。また、中門跡から西側に続く築地と、南北に通じる築地遺構が今までに三ヶ所検出されている。これで、寺域西限と合わせて四至を確定しつつある。しかし、東側の南北に通じる築地遺構の存在を究明していないが、今後の課題の一つであろう。方位は伽藍中軸線に対し約16°西に振れている。寺域の各幅を計測すると、東西間の幅108m（360尺）、南北間の幅は145m（483尺）となる。伽藍中軸線から測った寺域の東西各限の幅は、西限まで36m（120尺）、東限まで72m（240尺）となっている。すなわち伽藍中軸線から測った寺域は西限まで3/1町、東限まで2/3町と推測できた。

平成5～7年の大阪府教育委員会が府道バイパス予定地内の発掘調査で、基壇建物や掘立柱建物跡、土坑、井戸、溝などの遺構が検出した。また、平安時代中期の基壇の横から「正方寺」と墨書きされた土師器坏が出土している。

平成8年度の府道東側の調査区では羽口が出土し、寺の所属する鑄・鍛造が行われた可能性が高

く、寺を考える上で貴重な出土となった。

平成9年度の府道両側の調査区では、府道の調査区で確認されている溝の続きを検出した。調査区が伽藍の中心部からはずれていることもあって主だった遺構の検出は無かったが、遺構の広がりのあり方や南端部の地形の状況、基本層序を知ることができた。

平成12年度の府道西側の調査区は、正法寺の伽藍配置の講堂跡に推定される場所で大阪府教育委員会の報告書で東西10m、南北10mの基壇建物の続きを確認したこと、二つの調査結果から基壇建物の規模は東西約26mまで確認できることになった。

また、基壇建物の下層から掘立柱建物跡の柱列を確認した。2基の柱跡から創建時代の素弁蓮華文軒丸瓦が4点出土している点から、正法寺の創建当時の掘立柱建物跡に当たるのではないかと考える。

今回の調査区は平成13年7月19日付けて石岡則夫氏から、四條畷市教育委員会に四條畷市大字清滝378-3、4の一部において住宅建設に伴って、文化財保護法第57条の2第1項の規定により埋蔵文化財発掘の届出が提出された。その後、平成13年8月8日付けて木曾宏一氏から先に届出の出された同一の敷地である四條畷市大字清滝378-3、4の一部と385-2において店舗建設に伴う埋蔵文化財の届出が提出された。この場所の東側は、平成12年度国庫補助事業の調査において第3地区・第4地区と呼称した場所の西側の隣接場所で、発掘調査において溝及び柱穴等が検出した地域であり、開発内容の検討・協議を行い平成13年度国庫補助事業として平成13年8月20日から平成13年8月29日まで現地発掘調査を行うこととなった。

第3章 調査の成果

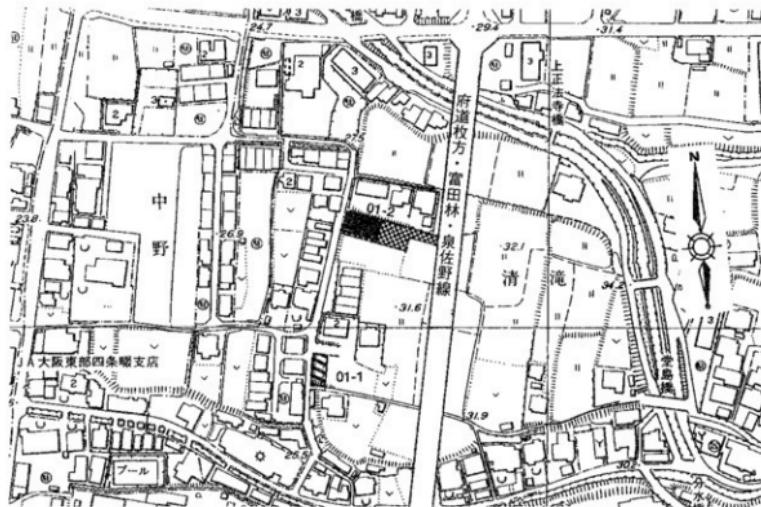
正法寺跡 01-2調査区 (第3図~第5図・図版1~図版9・図版14)

発掘調査は、四條畷市大字清瀧378-3・4の238.13m²と、清瀧378-3・4、385-2の312.51m²を行った。ここは平成12年まで一枚の東西方向に長い水田地であった。

この場所は、正法寺跡の西側端に位置する。調査にいたる経過で説明した昭和51年度の国庫補助事業に伴う発掘調査で西側の築地跡の続きになる土地である。

発掘予定地内に正法寺跡の基本層序と遺構を正確に把握するためのトレンチ調査を実施した。

最初にバックホーで西端に幅2m×長さ2.5mの第1トレンチを設定し、北側断面の基本層序を確認した。その結果、第2層下で西側に傾斜する土層を確認した。次に東西方向に幅1m×長さ27.5mの長い第2トレンチを設定した。第2トレンチに直交する形に西側から幅1m×長さ8.8mの第3トレンチ、幅2.2m×長さ8.8mの第4トレンチを設定した。第4トレンチ内において、溝状遺構及び土坑が検出されたため第4トレンチの北東部を2.2m×2.2m拡張した。また、第2トレンチの南側断面観察によって溝を確認した。この溝の性格を確認するために溝を中心に南側に幅3m×長さ2.6mの第5トレンチを設定した。調査面積は73m²で調査期間は平成13年8月20日から8月29日までであった。(第2図)

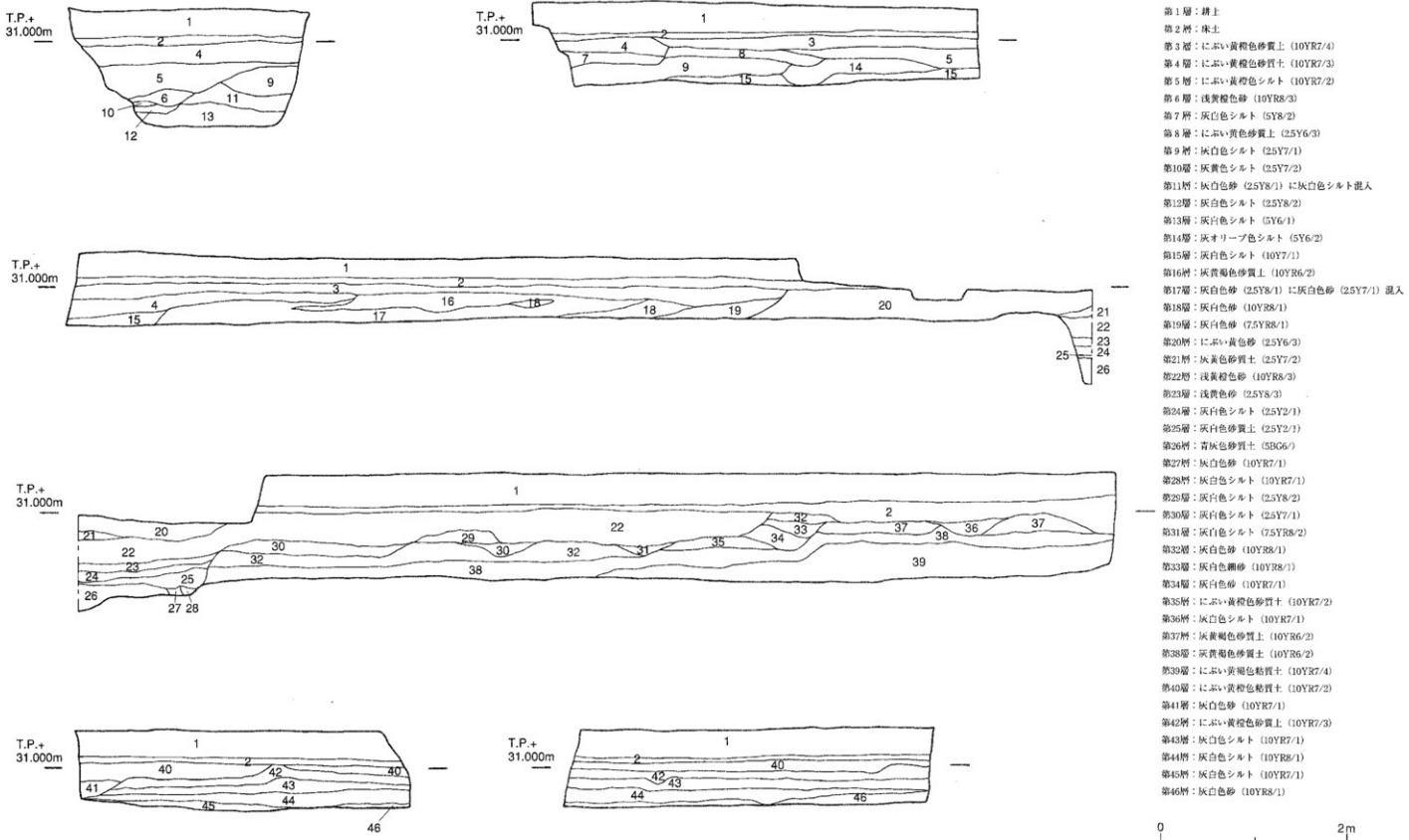


第2図 正法寺跡調査区位置図 S=1/2500

第1節 基本層序

今回の調査区で調査を行った堆積土層は次のとおりである。

- 第1層 耕土 厚さは、約30cmである。
- 第2層 床土 厚さは、約10cmである。床土下で海拔T P +31mを測る。
- 第3層 にぶい黄橙色砂質土 (10YR7/4) 第2トレンチの一部に堆積、厚さ約12cmである。
- 第4層 にぶい黄橙色砂質土 (10YR7/3) 第1トレンチと第2トレンチの一部に堆積、厚さ約20cmである。
- 第5層 にぶい黄橙色シルト (10YR7/2) 第1トレンチで西側に傾斜している。厚さ約20~35cmである。
- 第6層 浅黄橙色砂 (10YR8/3) 第1トレンチの第5層下に厚さ約20cm堆積している。
- 第7層 灰白色シルト (5Y8/2) 第2トレンチの西端の一部に堆積している。厚さ約10cmである。
- 第8層 にぶい黄色砂質土 (2.5Y6/3) 第2トレンチの一部に厚さ約10cmである。
- 第9層 灰白色シルト (2.5Y7/1) 第1トレンチと第2トレンチの一部に堆積が認められる。厚さ約20~30cmである。
- 第10層 灰黄色シルト (2.5Y7/2) 第1トレンチの一部に厚さ約4cmである。
- 第11層 灰白色砂 (2.5Y8/1) に灰白色シルト混入 第1トレンチに堆積、厚さ約15cmである。
- 第12層 灰白色シルト (2.5Y8/2) 第1トレンチに堆積、厚さ約10cmである。
- 第13層 灰白色シルト (5Y6/1) 第1トレンチの最下層で厚さ約25cmである。
- 第14層 灰オリーブ色シルト (5Y6/2) 第2トレンチの一部に厚さ約20cmである。
- 第15層 灰白色シルト (10Y7/1) 第2トレンチの西側の最下層で厚さ約10cmである。
- 第16層 灰黄褐色砂質土 (10YR6/2) 第2トレンチの一部に厚さ約15cmである。
- 第17層 灰白色砂 (2.5Y8/1) に灰白色砂 (2.5Y7/1) 混入 第2トレンチの中央部の最下層で厚さ約18cmである。
- 第18層 灰白色砂 (10YR8/1) 第2トレンチ中央部の一部の最下層で厚さ約10cmである。
- 第19層 灰白色砂 (7.5YR8/1) 第2トレンチ中央部の一部の最下層で厚さ約20cmである。
- 第20層 にぶい黄色砂 (2.5Y6/3) 第2トレンチ中央部の最下層で厚さ約35cmである。
- 第21層 灰黄色砂質土 (2.5Y7/2) 第2トレンチで検出した溝状遺構の上層の堆積土で厚さ約8cmである。
- 第22層 浅黄橙色砂 (10YR8/3) 第2トレンチで検出した石組み遺構の上層の堆積土で厚さ約20~35cmである。



第3図 正法寺跡 01-2 断面実測図

- 第23層** 浅黄色砂（2.5Y8/3） 第23層から第28層は第2トレンチで検出した幅約1.9mの溝状遺構の堆積土層である。厚さ約10cmである。
- 第24層** 灰白色シルト（2.5Y2/1） 厚さ約10cmである。
- 第25層** 灰白色砂質土（2.5Y2/1） 厚さ約10~20cmである。
- 第26層** 青灰色砂質土（5BG6/） 溝状遺構の最下層の堆積土である。厚さ約30cmである。
- 第27層** 灰白色砂（10YR7/1） 約8cmである。
- 第28層** 灰白色シルト（10YR7/1） 約10cmである。
- 第29層** 灰白色シルト（2.5Y8/2） 第2トレンチの一部に厚さ約12cmである。
- 第30層** 灰白色シルト（2.5Y7/1） 第2トレンチの一部に鋤溝状に検出した。厚さ約10cmである。
- 第31層** 灰白色シルト（7.5YR8/2） 第2トレンチの一部に鋤溝状に検出した。厚さ約10cmである。
- 第32層** 灰白色砂（10YR8/1） 厚さ約20cmである。
- 第33層** 灰白色細砂（10YR8/1） 厚さ約10~20cmである。
- 第34層** 灰白色砂（10YR7/1） 厚さ約10cmである。
- 第35層** にぶい黄橙色砂質土（10YR7/2） 厚さ約20cmである。
- 第36層** 灰白色シルト（10YR7/1） 第2トレンチの一部に鋤溝状に検出した。厚さ約18cmである。
- 第37層** 灰黄褐色砂質土（10YR6/2） 厚さ約20cmである。
- 第38層** 灰黄褐色砂質土（10YR6/2） 第2トレンチの東側の約10mにわたり、一部の最下層の厚さ約20cmである。
- 第39層** にぶい黄褐色粘質土（10YR7/4） 第2トレンチの東端に厚さ約30cm最下層の堆積土である。

第2節 遺構（第4図～第5図・図版3～5・図版7～8）

第2トレンチの調査で断面観察を行い溝状遺構を検出した。その続きを確認するために南北方向に第4トレンチ・第5トレンチを設定した。第4トレンチで、溝状遺構1基と土坑を3基検出した。また、第5トレンチから溝状遺構と落ち込み状遺構が検出した。

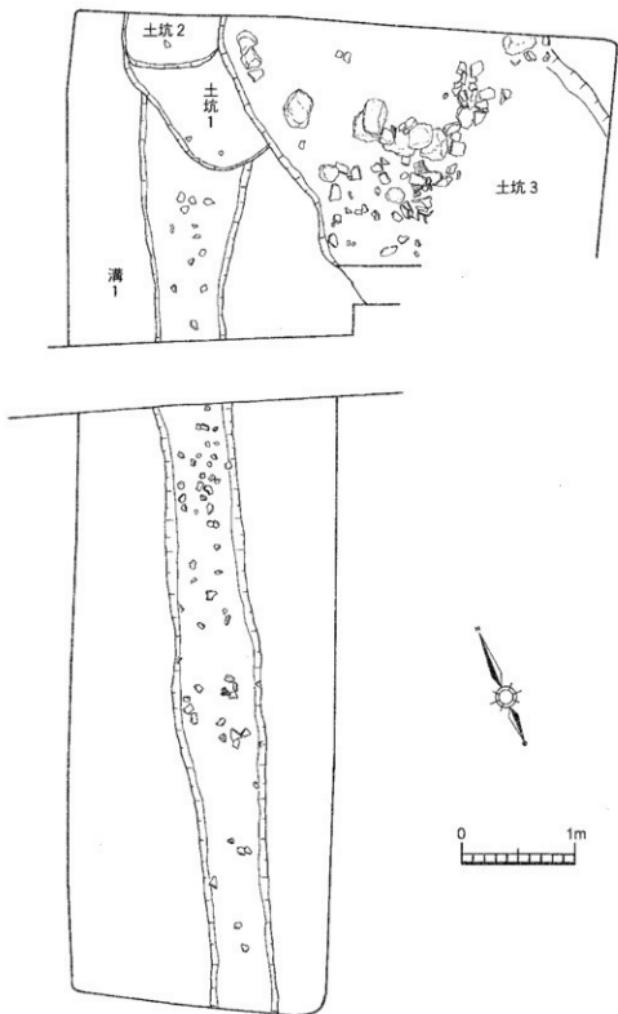
第4トレンチ

◎溝（第4図・図版5）

第4トレンチの南北方向に溝を確認した。溝の規模は南で幅0.6m・北で幅1m、長さ8.2mまで検出した。検出面の高さT・P+30.95mであった。堆積土層は、暗灰黄色砂層（2.5Y4/2）で深さは南端で約10cm、北側で約23cmで比高差の状況から南から北に傾斜している。溝の断面から皿状

で溝底の地山を確認した。

堆積土層内から10cm前後の平瓦片が59点と須恵器2点が出土した。その内の1点は、奈良時代の杯である。他に、花崗岩の石が含まれていた。



第4図 正法寺跡 01-2 第4トレンチ 土坑・溝状遺構内瓦出土状況

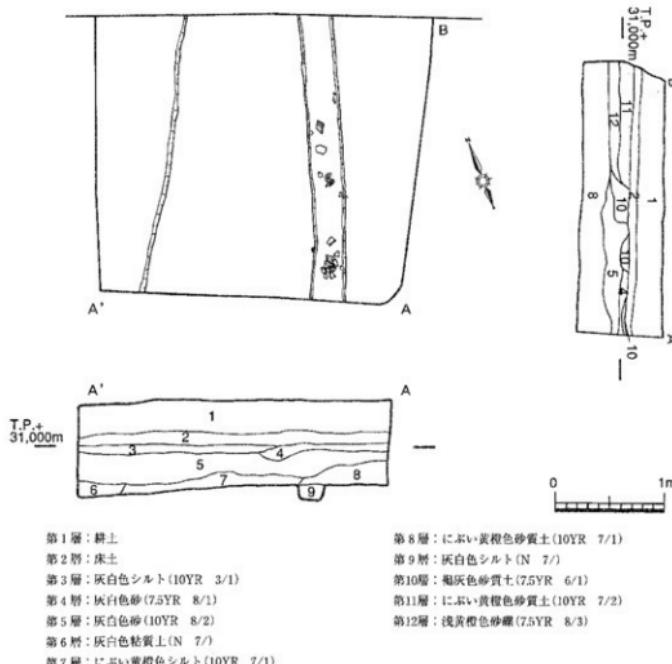
◎ 土坑（第4図・図版4・図版7～8）

第4トレンチの北端で検出した遺構で、3基の土坑を検出した。溝を切る形で土坑1を検出した。また、土坑1を切る形で土坑2を検出した。土坑1と土坑2を切る形で土坑3をそれぞれ検出した。

土坑1は、最大幅0.9m・長さ0.95mまで確認できた。検出面の高さT・P + 30.902mであった。土坑内の堆積土層は灰黄色砂質土層（2.5Y7/2）で深さ20cmの皿状で土坑底の地山を確認した。堆積土層内から平瓦片が2点出土した。

土坑2は、土坑1の北側で検出した。規模は、最大幅0.8m・長さ0.5mまで確認できた検出面の高さT・P + 30.732mであった。土坑内の堆積土層は緑灰色シルト層（5G6/1）で深さ27cmの皿状で土坑底の地山を確認した。堆積土層内から平瓦片が1点出土した。

土坑3は、検出した規模は最大幅2.5m・長さ2.2mまで確認できた。検出面の高さT・P + 30.937mであった。土坑内の堆積土層は第1層 灰黄色砂質土（2.5Y7/2）、第2層 浅黄橙色砂



第5図 正法寺跡 01-2 第5トレンチ 遺構内瓦出土状況及び断面実測図

(10YR8/3)、第3層 浅黄色砂 (2.5Y8/3)、第4層 灰白色シルト (2.5Y2/1)、第5層 灰白色砂質土 (2.5Y2/1)、第6層 青灰色砂質土 (5BG6/)、第7層 灰白色砂 (10YR7/1)、第8層 灰白色シルト (10YR7/1) で深さ80cmの皿状で土坑底の地山を確認した。堆積土層内から30cm前後の花崗岩の石と均整唐草文軒平瓦1点(図版14-11)・玉縁瓦1点・平瓦が多数出土した。

第5トレチ(第5図・図版6)

◎溝

第5トレチは第2トレチの南側に調査区を設定した。トレチの東側で溝を、西側で落ち込み遺構を確認した。溝の規模幅0.3m、長さ2.6mまで検出した。検出面の高さT・P+31.053mであった。

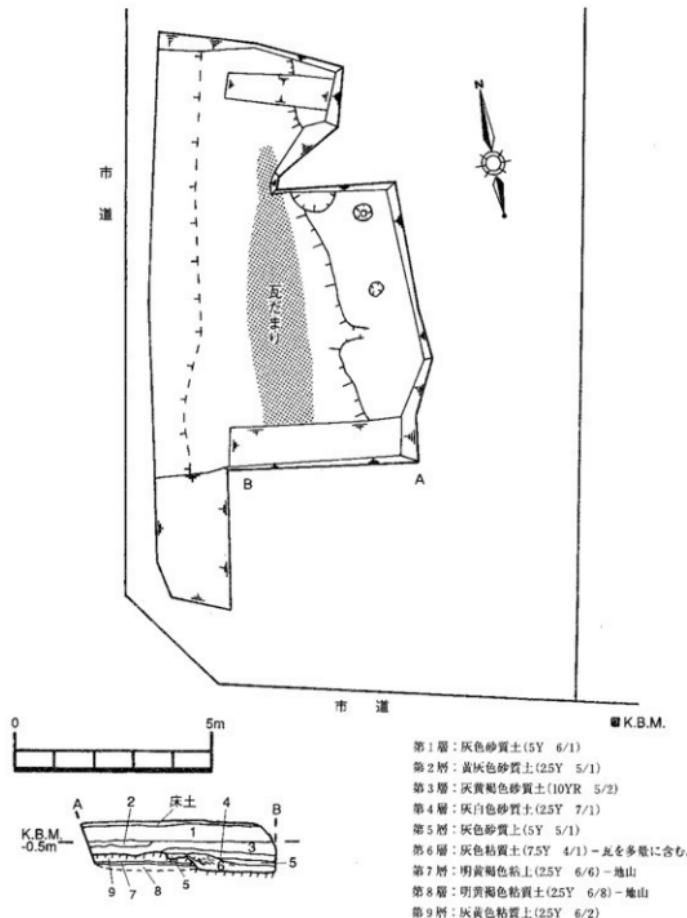
南側断面と東側断面は、第1層 耕土、第2層 床土、第3層 灰白色シルト (10YR3/1)、第4層 灰白色砂 (7.5YR8/1)、第5層 灰白色砂 (10YR8/2)、第6層 灰白色粘質土 (N7/)、第7層 にぶい黄橙色シルト (10YR7/1)、第8層 にぶい黄橙色砂質土 (10YR7/1)、第9層 灰白色シルト (N7/)、第10層 掲灰色砂質土 (7.5YR6/1)、第11層 にぶい黄橙色砂質土 (10YR7/2)、第12層 浅黄橙色砂疊 (7.5YR8/3) である。溝は第9層の灰白色シルト (N7/) で深さは、南側で13cm北側で17cmで皿状で溝底の地山を確認した。堆積土層内から5~10cm前後の平瓦片が16点と花崗岩の石が出土した。

正法寺跡 01-1調査区 (第6図~第8図・図版10~図版14)

平成13年4月18日付けで株式会社 山地建設 代表取締役 山地 勉氏が、四條畷市教育委員会に四條畷市大字清瀧387-1. -6における宅地造成に伴って、文化財保護法第57条の2第1項の規定により埋蔵文化財発掘の届出が提出された。

今回の開発場所で確認調査を実施したところ、創建瓦の素弁八葉蓮華文軒丸瓦が2点(第7図-1・2、図版13-1・2)出土した。正法寺の推定伽藍配置によると寺域の西端を示す築地にあたる場所である。昭和51年度に今回の開発場所から北側約45mの地点においてトレチによる発掘調査を行った結果、素弁八葉蓮華文軒丸瓦や三重弧文軒平瓦などの多くの瓦が出土し、築地跡と礎石を確認している。

以上の結果に基づいて開発内容を検討し申請者と協議したところ、宅地造成に伴い切土を行なう箇所について遺跡を破壊するため、発掘調査を実施することとなった。調査面積は75m²、調査期間は平成13年4月26日から5月7日までであった。(第2図)



第6図 正法寺跡 01-1 調査区 遺構平面図・断面図実測図

第1節 基本層序

第I層 盛土 厚さは、約40cmである。

第II層 耕土 厚さは、約40cmである。現在の耕土。

第III層 床土 厚さは、約10cmである。現在の床土。

第IV層 灰色砂質土 厚さは、約40cmである。

第V層 灰黃褐色砂質土 厚さは、約10~30cmである。

第VI層 灰色粘質土 厚さは、約10~40cmである。多量の瓦を包含している。

第VII層 灰黃色砂質土 遺構面である。

第VIII層 明黃褐色粘土 地山面である。

第2節 遺 構

床土より約75cm掘り下げたところで、灰黃色砂質土の遺構面を確認した。この面の中央より若干東側において、南北方向に延びるラインを検出した。その長さは約10cmである。当初は南北方向に延びる溝状遺構の東側肩部と思われたが、サブトレンチを掘削し断面観察を行なったところ、西側へ向かって低くなる落ち込み状遺構であることがわかった。落ち込み状遺構の深さは約45cmである。また遺構内、特に東側肩部付近の上層及び中層から大量の瓦が出土した。これらの瓦は、東側から西側へ向かって崩れ落ちたように重なり合った状況で出土した。

第3節 遺 物

◇瓦 類

今回出土した瓦類は、コンテナの数にして約100箱分であった。そのほとんどは平瓦・丸瓦で、瓦だまりから出土している。比率的には平瓦が多く出土した。

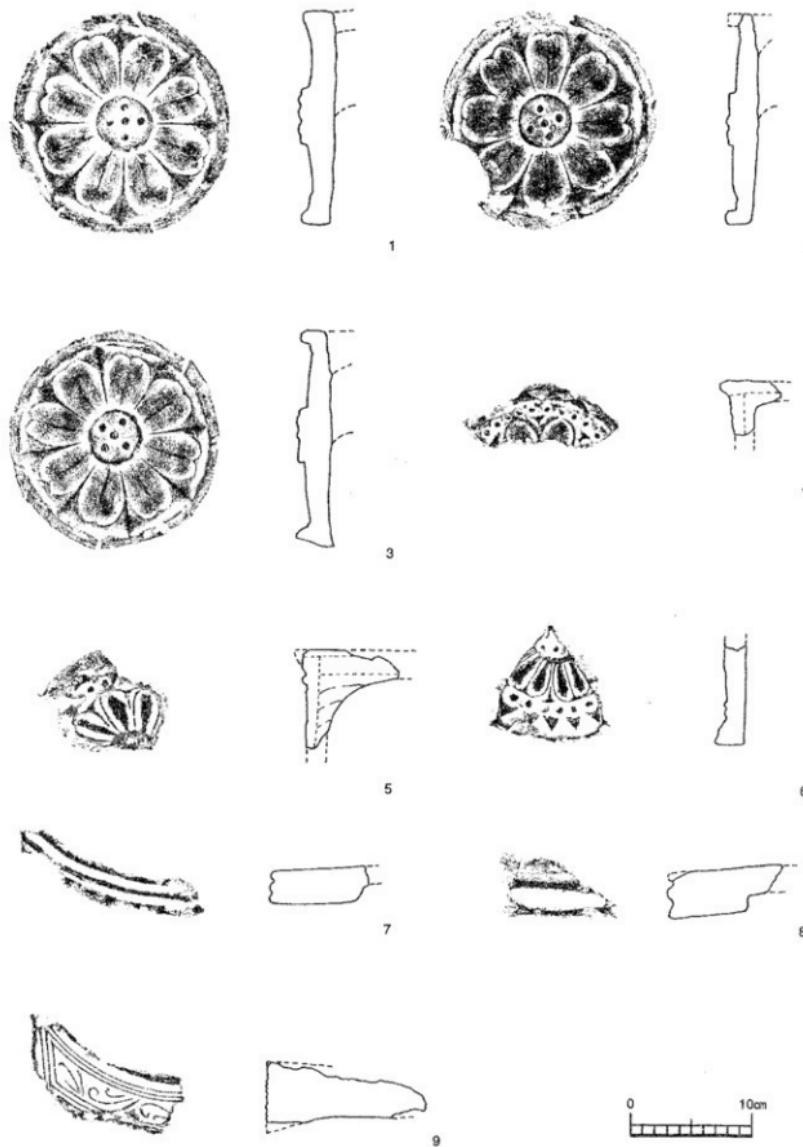
以下、確認調査で出土した瓦も含めて述べる。

軒丸瓦（第7図-1~6・図版13-1~6）

○確認調査で出土

1は素弁八葉蓮華文軒丸瓦である。連弁の中央に稜線をもち、間弁は中房から外縁に向かって扇状に広がっている。中房は凸状で断面台形を呈し、蓮子を1+4で配している。瓦当部裏面の丸瓦の接合部分には刻み目状の痕跡が見られる。瓦当部裏面は縦方向のナデ調整を行なったあと周縁をナデ調整している。正法寺の創建瓦である。（第7図-1・図版13-1）

2は素弁八葉蓮華文軒丸瓦である。連弁の中央に稜線をもち、間弁は中房から外縁に向かって扇状に広がっている。中房は凸状で断面台形を呈し、蓮子を1+4で配している。瓦当部裏面の丸瓦の接合部分には刻み目状の痕跡がみられる。瓦当部裏面は指押さえ痕が顕著にみられ周縁をナデ調整している。また丸瓦凹面と瓦当部の接合部は、ナデ調整が行われている。正法寺の創建瓦である。（第7図-2・図版13-2）



第7図 正法寺跡 01-1 調査区 出土遺物

◎ 瓦だまり出土

3は素弁八葉蓮華文軒丸瓦である。連弁の中央に稜線をもち、間弁は中房から外縁に向かって扇状に広がっている。中房は凸状で断面台形を呈し、蓮子を1+4で配している。瓦当部裏面の丸瓦の接合部分には刻み目状の痕跡が見られる。瓦当部裏面は継方向のナデ調整を行ったあと周縁をナデ調整している。また丸瓦凹面と瓦当部の接合部は、中央付近までナデ調整が行われている。外縁部の断面形態は、上部が1+2と同じように直角に近いことに対し、下部は三角形状に鋭角である。正法寺の創建瓦である。(第7図-3・図版13-3)

4は単弁蓮華文軒丸瓦である。外縁には凸鋸歯文、外区には10個以上の珠文を巡らす。界線はなく、間弁は小さな三角形を呈している。丸瓦は瓦当部に深く差し込まれており、充填粘土は多量であったと思われる。過去の出土例から、瓦当文様は単弁八葉蓮華文で珠文は31個、中房には蓮子を1+8で配している瓦と考えられる。(第7図-4・図版13-4)

5は単弁蓮華文軒丸瓦である。蓮弁は反時計回りに傾いている。外縁には凸鋸歯文、外区には珠文を巡らす。界線はない。間弁は高く、三角形を呈している。丸瓦は瓦当部に差し込み、丸瓦四面と瓦当部の接合部はナデ調整が行われ、充填粘土は多量である。過去の出土例から、中房には蓮子を1+1+8で不均等に配している瓦と考えられる。(第7図-5・図版13-5)

6は複弁蓮華文軒丸瓦である。外縁には凸鋸歯文、外区には6個以上の珠文を巡らす。界線はなく、間弁は高く、中房まで達しない小さな三角形を呈している。過去の出土例から、一部に単弁が混ざる複弁蓮華文で、外縁には25個の凸鋸歯文、外区には31個の珠文を巡らし、中房には蓮子を不均等に1+4+8で配している瓦と考えられる。(第7図-6・図版13-6)

軒平瓦(第7図-7~9・図版14-7~9)

◎ 瓦だまり出土

7は三重弧文軒平瓦である。顎は段顎を呈するが、8と比較すると鈍角である。顎部の凸面はヨコナデ調整を施し、凹面は端部のみヨコナデ調整を施し布目痕がみられる。8と比較すると厚みが薄い。(第7図-7・図版14-7)

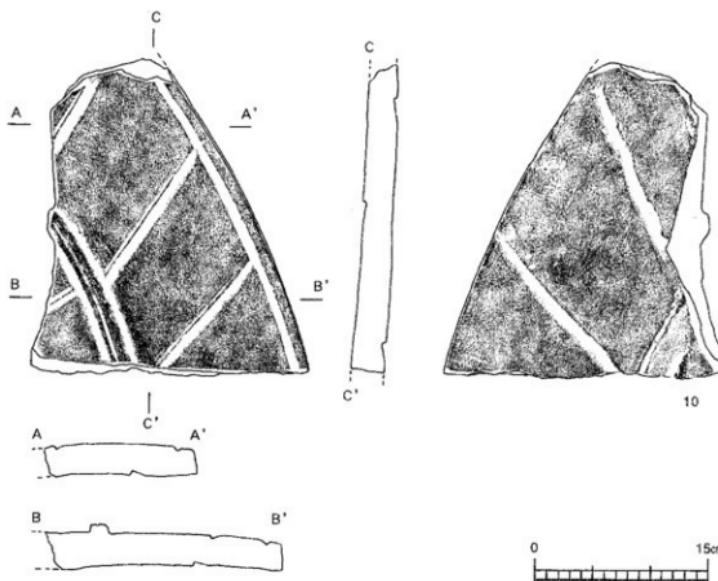
8は三重弧文軒平瓦である。顎は段顎を呈する。顎部の凸面はヨコナデ調整を施し、凹面は端部のみヨコナデ調整を施し布目痕が若干みられる。(第7図-8・図版14-8)

9は均整唐草文軒平瓦である。外区に三重の圓線を巡らし、外縁は幅が狭く、高さも低い。顎は曲線顎を呈する。凸面はタテナデ調整を施している。凹面は著しく剥離している。(第7図-9・図版14-9)

道具瓦（第8図-10・図版14-10）

◎ 瓦だまり出土

10は鷲尾の小片である。法量は、長さ約27cm・最大幅約25cm・厚さ約3cmである。鷲尾の右側側面の一部で、鰭部と胴部の境目には貼り付けによる凸帯がみられる。表裏面とも削り出しによって段型をあらわしており、裏面には腹部を貼りつけた痕跡がみられる。形式から白鳳期の鷲尾と考えられることから、創建当時のものである。



第8図 正法寺跡 01-1-2 調査区 出土遺物

第4章 ま と め

正法寺跡は数次にわたって発掘調査され、白鳳時代の素弁八葉蓮華文軒丸瓦を創建瓦とし、三重の塔を東西にもつ薬師寺式伽藍配置の大寺院であったと推定され、白鳳時代から室町時代に至るまで存在したことが判明している。寺域からは『正方寺』の墨書のある土師器皿が出土している。

また、大阪府教育委員会が平成5～7年にかけておこなった府道枚方・富田林・泉佐野線新設バイパス建設工事に伴う発掘調査で確認した遺構との関連を確認するために、四條畷市教育委員会が平成12年に発掘調査をしたところ基壇建物の続きが確認された。基壇建物の規模は大阪府の調査とあわせ東西26mまで確認できた。建物の礎石は浅い窪みをもつ一辺が1.2m前後のものが確認され、柱間は2.5～3.0mであった。それを復元すると南北4間×東西8間と想定される。この建物の時期は平安時代と考えられるものである。この寺は薬師寺式伽藍配置と考えられているが、それに従うと多少のずはあるものの講堂の位置にあたると考えられる。また、乱石積みの瓦敷きの中には円筒埴輪が転用されており、かつては生駒山系の裾野に築かれた古墳群であった往時をしのぶことが出来る。

今回発掘調査を実施した場所は、正法寺の推定伽藍配置によると寺域の西端を示す築地の南西部分にあたると考えられるが、発掘調査ではそれらの遺構は確認できなかった。しかし、この調査地区の西側には南北方向に直線的に伸びる約1m程の段差があり、これが寺域の西端を示していると考えられる点や、昭和51年度に今回の開発場所の北側約45mの地点において素弁八葉蓮華文軒丸瓦や三重弧文軒平瓦などの多くの瓦が出土し築地跡と一部で礎石を確認している点、また前述したように大量の瓦が南北方向の帶状に西側へ崩れ落ちたような状況で堆積していたことなどから、今回の調査範囲の東近くに築地が存在していたと推定できる。また、今回の発掘調査の大きな成果は鷦尾片が出土したことである。この鷦尾は回廊の南西部分にあたると推定されている場所の瓦溜まりから出土した。回廊は確認できなかったのが残念である。しかし、この鷦尾はその形や創建瓦と共に伴していることから創建当時に屋根を飾っていたと考え、伽藍の様相を知る上で貴重な資料を得ることが出来た。なお、鷦尾は四條畷市内および正法寺跡において初めての出土である。

昭和59年の発掘調査において、寺域の北東角で平瓦三枚が重なって溶着したものが出土したが、これは寺域周辺に瓦窯や工房があったことを示している。

また、寺域に接近する東側を平成8年に発掘調査した際には、ふいご羽口・鉛滓・鉄釘など金属工房関係の遺物が出土した。これらは平安時代に属するものであった。

寺院の発掘調査では伽藍配置など主要堂塔解明に重点がおかれるのは当然のことであるが、寺院

に付属する造営関係工房や修理所などの金属関係工房が解明されることは、寺の全容を知る上で重要なことである。寺院の付属工房では銅や青銅製の仏像や仏具の生産にあたり、鉄製品に関しては工具や農具などの生産・修理にあたった。正法寺でも専門工人を組織し、寺に必要な金属製品の生産や修理にあたったのは当然のことと考えることができる。

正法寺の1km北西に位置する四條畷市讃良寺跡は、正法寺と同時期の白鳳時代に属する古代寺院である。正法寺・讃良寺・寝屋川市高宮廃寺は素弁蓮華文軒丸瓦を創建瓦とする同系列の寺院で2km内に三寺が接近して建立されている。

正法寺を中心にして東側が工房区域で、200m南側に集落木間池北方遺跡が存在した。この集落遺跡の河川から奈良時代の土馬数体とともに須恵器円面鏡や土器類が出土し、平城京と同じように罪や穢れをはらう祭祀が行われていた。また、文字資料は「・・麻呂」や南野遺跡で「大」などの墨書き土器が出土している。

このように数次にわたる発掘調査と周辺調査によって正法寺をとりまく環境が想定できるようになった。

報告書抄録

フリガナ	ショウホウジアトハックツチョウサガイヨウホウコクショ
書名	正法寺跡発掘調査概要報告書
シリーズ名	国庫補助金事業
編著名	野島 稔 村上 始
編集機関	四條畷市教育委員会
所在地	〒575-8501 大阪府四條畷市中野本町1番1号 TEL 072-877-2121
発行日	2002(平成14年) 3月31日

所収遺跡	所在地	コード 市町村	北緯 東経	調査期間	調査面積	調査原因
ショウホウジアト 正法寺跡	四條畷市 清滝	272299	北緯 34° 44' 16" 東経 135° 38' 58"	平成 13年8月20日 ~8月29日	73m ²	個人住宅

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
正法寺跡	寺院	白鳳時代 平安時代	石組み遺構 瓦だまり	軒丸瓦 軒平瓦 鷺尾	西側塗地跡

図版



(西から)



(東から)

図版 2 正法寺跡 機械掘削・調査精査



(西から)



(東から)

図版3 正法寺跡 レンチ内精査・遺構検出状況



(西から)



(北から)

図版4 正法寺跡 第4トレンチ遺構検出状況



(東から)



(東から)

図版 5 正法寺跡 溝状遺構検出・完掘状況



(北から)



(北から)

図版 6 正法寺跡 調査区完掘状況



(東から)



(東から)

図版7 正法寺跡 土坑検出状況



(南から)



(東から)

図版 8 正法寺跡 土坑掘り下げ・完掘状況



(西から)



(西から)

図版9 正法寺跡 トレンチ内排水・埋め戻し状況



(西から)



(東から)

図版 10 正法寺跡 01-1 調査前全景・調査スナップ



(北西から)



(南から)

図版 11 正法寺跡 瓦だまり検出状況・創建瓦出土状況



(南から)



図版 12 正法寺跡 瓦だまり出土状況

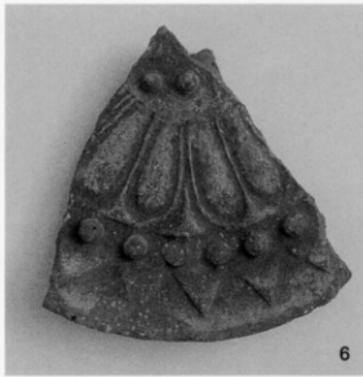
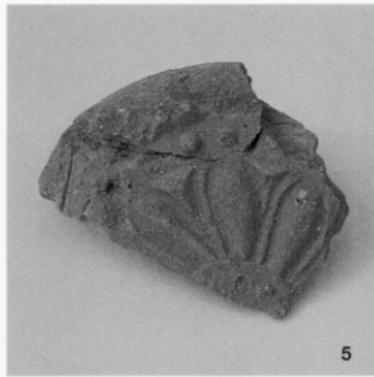


(北から)



(南から)

図版 13
正法寺跡 出土遺物



図版 14
正法寺跡 出土遺物



10



10



7



8



9



11

12

正法寺跡発掘調査概要報告書

平成14年3月発行

編集 四條畷市教育委員会

発行 四條畷市教育委員会
四條畷市中野本町1-1

印刷 川西軽印刷株式会社